

# ジュラロン テクニカル ニュース

No.34(通巻 634)

令和 8 年(2026 年) 7 月号

ホルムズ海峡の封鎖が続いているが、今後も封鎖が繰り返されるというリスクは消えないと考えられる。イランの体制が残り、米国・イスラエルへの怨念が消えない限り、湾岸のエネルギー供給体制はいつ失われるか分からないリスクの塊である。

世界の石油需要もピークアウトに向かっており、これ以上増えることはなさそうである。車でいえば、これだけガソリン価格が上がれば自然とEV車への移行が進む。

発展途上国では、外貨不足からガソリンが輸入できず内燃機関の車が無用の長物となりつつある。ホルムズ封鎖で漁夫の利を得ているのは、米国の一部石油精製企業、ロシア、中国、オーストラリアなど。

我が国では、政府が「目詰まり」があるというが、現実には目詰まりを解消する具体策は見えて来ない。米騒動とまったく同じで、何処かの倉庫に隠されているのだろうか？

トランプの発言は、二転三転、四転五転…、この先どうなるのか見守るしかないように思う。

## 『ナフサ』

原油を蒸留すると「石油ガス」「ガソリンやナフサ」「軽油」「重油」など分解されて利用されている。ナフサからは、エチレン、プロピレン、ブタジエンといった炭化水素が作られる。エチレンはプラスチックの原料となり、最も多用される物質であり、産業の米といわれている。ナフサの調達先は「国産 4 割」「中東 4 割」「その他 2 割」といわれているが、実際にはナフサも 8 割を中東に依存している。

ナフサに頼らずエチレンを製造する試みも始まっているが、今年 1 月北海道大学の研究グループが植物の細胞壁を構築するセルロースの成分である糖「グルコース」を原料として、エチレンなどを製造する研究成果を発表している。ゼオライト触媒を用いてアセタール化するという方法だとか。これからさらに研究が進むと良いのだが。

また、千葉大学の研究グループは、2024 年 10 月に光触媒を使ってエチレンを作る方法を発表している。太陽からの光エネルギーを使って、二酸化炭素や一酸化炭素からエチレンを作るという。実際にメタンやエタン、プロパンなども得られたとか。

今後の研究成果が楽しみである。

## (1)

ホルムズ海峡の封鎖が解かれたとき原油価格は下落するだろうが、需要のピークアウトが近づく中で世界のエネルギーは混んとした転換期に入ると予想される。

OPEC から UAE が脱退し、イランがどうするかは不明だが OPEC は空中分解しつつあるのではないか。中国の原油需要が減少に転じ、日本をはじめ主要国は需要減退の坂道を駆け下りている。ロシアは独自に原油を輸出するので、漁夫の利を得ると考えられる。トランプも大增産を唱えるなか、エネルギーの主役が多様化しつつあり石油需要が回復することはなさそうな雰囲気になってきたのではないか。

## (2)

オークマのM/Cに、某社の不水溶性油剤を使用しているユーザーがあり、火災の心配と水溶性にした場合のコストダウンが魅力で何とかならないか?との打診があった。

さっそく訪問し、ワークがSC材、鋳物、アルミなどの部品加工だった。ユーザーの心配は「錆や腐蝕」であったので、倍率管理(15~20倍)が最も重要であると説いた。また機械にはオイルスキマーが設置されていないので浮上油などを抱き込む性質を持つ**ECO16C**を推奨。見積もりを提出したところ、「高いね…、何とかならないか」との要望があった。そこで「2缶半額有償」「フラッシング指導」「濃度管理のアフターフォロー」という大サービスを提案した。不水溶性からの切り替えなので、安価品では上手くいかないと申し入れた。

後日、ユーザーから「使ってみる」ということになり、フラッシングの日程を調整することになった。

## (3)

販売店のT社社長から、「**ECO16C**を使用している某ユーザーから、新規先を紹介してもらった」との連絡があり、さっそく訪問した。現在は、不水溶性で自動車部品を加工しているが、マザックのマシニングセンタを新設するにあたり、火災やランニングコスト低減から水溶性を使用したいとのこと。某ユーザーから「洗浄性が良いので機械が綺麗になる」「床の掃除にも使用している」と前評判を聞いておられ、さらに「濃度管理もしてもらえると本当? 鉄系が主でSUS、アルミも加工しているが・・・。」との質問があった。

このユーザーにとって水溶性は初めての採用なので、相応の手間と不安もあるかと思っただが、既に使用しているユーザーからの太鼓判もあり、「**ECO16C**を使ってみよう」ということになった。口コミでの紹介なのでフォローをキッチリしなくてはと覚悟を決めた。最後にユーザーから「注文するので見積書を入れておいて」と即決となった。現在、工具寿命や加工条件を決めるために濃度管理の目安を探っているとこるである。

## (4)

導体の製造装置の部品加工に**ECO2024**をご使用しているK社の社長が、隣接の同業者の社長に「ジュラロンのフォローは最高だよ、使ってみたら」と強く推奨してくれた。さっそく弊社に連絡が入り訪問。K社では、鉄道車両の部品や半導体の装置部品を加工から製缶、組み立てまで一貫生産している企業であった。

面談早々に、「実はこのアルミのワークにシミが出て困っている、現使用の油剤に添加剤を添加してpHを下げているが、治具が当たるところにシミが出てしまう。」と現物のワークを見たところ「ガルバニック腐蝕ですね、異種金属の接触面に電気腐蝕が発生しているのではないのでしょうか?」。即答で「**ECO16C**が良いでしょう。」と伝えた。現場に案内され、今年2月に新設したオークマのM/Cで**ECO16C**をテストすることになった。

## (5)



傘を閉じたり開いたりしたときに、傘を固定する出っぱった部分が傘の上と下にある。閉じたときに固定するところが「下はじき」で、開いたときに固定するところが「上はじき」という。いずれも指ではじいて開閉をするところから「はじき」というのだとか。

中央のシャフトは「中棒」(なかぼう)、手に持つ部分は「ハンドル」という。そして傘の布を広げる骨は「親骨」(おやぼね)で、中棒から伸びて親骨を支えている骨は「受骨」(うけぼね)という。

そして傘の布を伝って雨のしずくが落ちる親骨の先端部分は「露先」(つゆさき)、中棒からつながる傘の上部の先端は「石突き」(いしづき)とよばれている。

## (6)

「牛マグネット」、牛に磁石を飲み込ませるといふ。牛はどういうわけか細長いものなら何でも飲み込んでしまう習性があるという。牧場に落ちているクギや金物を拾い食いしてしまうのである。異物のほとんどが第二胃の底に沈むが、飲み込んだ金属が胃を突き抜けて心臓を傷つけないように、磁石に吸い寄せるのである。特殊なパイプを使って胃の中に長さ 6cm くらいの「カウマグネット」や「バーネット」という磁石を入れるのである。いったん胃にいれた磁石は生涯かそのままか、取り出したいときは別の強力な磁石で牛を立たせて固定し、口から専用のレトリーバーと呼ばれる器具を挿入して、古くなったカウマグネットを磁力で引き寄せて回収する。胃の中は外から見えないので、方位マグネットを使う。アメリカの西部劇に、線路の近くに牛の群れが集まり蒸気機関車が急停車する場面がある。牛は線路の鉄サビが大好きとか。

## (7)

日本での製造元祖は 1865 年(慶応元年)、長崎の藤瀬半兵衛がレモネードを「レモン水」と名づけ、売り出したことから始まったと伝えられている。しかし「レモン水」という名は広まらず、その後「レモネード」が訛った「ラムネ」の呼び名が定着・一般化した。

日本に初めて炭酸飲料が伝えられたのは、米国から浦賀にペリー提督率いる艦隊が来航したとき(1853年・嘉永6年)だといわれている。

そのとき、飲料水の一部として艦に「炭酸レモネード」が積んであり、幕府の役人にこれを飲ませたのが炭酸飲料の第1号。

当時は、コルクで栓をしたきゅうりビンに入っており、栓を開けた際に「ボン」と大きな音がし、シューと泡が出た。役人は驚いて「さては新式銃か!」と思わず腰の刀に手をかけたとか(真偽不明)。このため当時は「ポン水」や、「鉄砲水」などと呼ばれていた。これが「ラムネ」の原型で、ラムネという名称も「レモネード」という言葉が訛ったものだといわれている。

\*きゅうりビンと呼ばれていたビンは、1809年にイギリスのWF.ハミルトンが、ラムネ(レモネード)を入れるビンとして考案した。

栓はコルクだったので、栓を乾かすとラムネの炭酸が抜けてしまうので、きゅうりビンはわざわざ立たないように、寝かせておくよう底を丸く作ってあった。

(8)

何と読むのか、間違って読んでないか? いつも「何と読むんだったかな?」という字句がある。

団栗…どんぐり	湧出…ゆうしゅつ	黄昏…たそがれ	湯中り…ゆあたり
欠伸…あくび	咽る…むせる	萌し…きざし	朝餉…あさげ
何れ…いづれ	章魚…たこ	成可…なるべく	為出来す…しでかす
蚊帳…かや	摩耗…まもう	欠片…かけら	合羽…かっぱ
抽斗…ひきだし	百日紅…さるすべり	咽ぶ…むせぶ	行火…あんか

(9)

「日本三大商人」。近江商人は、近江の国(滋賀県)を拠点に全国を行商し、上方と地方を結ぶ交易をしていた。「売り手よし、買い手よし、世間よし」の三方よしで有名。

伊勢商人は、伊勢の国(三重県)を発祥とし、江戸などに進出し豪商となった。松阪商人ともよばれ呉服店を中心に現在の大規模小売業の基礎を作った。

大阪商人は、天下の台所といわれた大坂を拠点とし、金融や流通の中心として活躍した。これらの商人の繁栄の原理は、「お客の声にしっかり耳を傾ける」「数字を理解して改善の糸口を一つずつ探してみる」「約束や挨拶、説明などを昨日より今日はもっと丁寧に行う」という、現在忘れかけている基本を忠実に実践したということではないか。

(10)

宮城県の栗駒山に源流を持つ一迫川(いちほさま)に湧く秘湯のひとつ「温湯温泉(ぬるゆ)」は、古くは「寒湯」と書き平安の末に山崩れで湧出したと伝えられている。

また、宮城・岩手・秋田にまたがってそびえる栗駒山の南麓、花山村の山あいにある「温湯」「湯の倉」「湯浜」の三湯を「花山三湯」という。

温湯温泉は、明治になって栗駒山の火山活動の活発化により湯温が上昇し、温泉名も「温湯」となった。泉質はNa塩化物泉、泉温64.4℃、pH7.6で、この佐藤旅館には五か所の風呂がある。安7年(1280年)鎌倉の政争に敗れて移り住んだ三浦氏の一族が開宿し、大正時代まで続き第25代泉主の三浦陽三郎氏を最後に、昭和4年に佐藤家に所有が移り現在に至っている。

